

令和6年度 学校研究の概要

1 研究主題

「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」

～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実

～

2 主題設定の理由

【社会的な背景から】

新型コロナウイルスのパンデミックや急速な AI の普及、DX による社会構造の変化など、現代の社会は複雑で予測困難となってきた。このような時代だからこそ、一人一人の子供が持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、自らの意思をしっかりともち、主体的に考え、多様な他者と協働しながら納得解を導き出すことができる資質・能力の育成が求められる。そして、学校教育は、生涯にわたって学び続ける基礎を培う役割を担っている。

【自立した学習者の育成】

「自立した学習者」とは、今、求められる資質・能力を身に付けるために、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける姿であると捉えている。また、自立した学習者には、自らが自己の目標を設定し、目標達成に向けて自らの学びを主体的に調整し、実行し、進捗状況を評価し目標を再設定するといった、自ら学びを調整する力が必要であると考え。さらに、一人一人の子供を自立した学習者に育成していくためには、教師主導の授業から脱却し、一人一人の子供を主語とした学習者主体の授業へと「観」を転換していく必要がある。子供自身が学習の中心に立ち、主体的に学びを進める授業への改善である。

【研究主題及びサブテーマ】

そこで、本校では、研究主題及びサブテーマを「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～とした。本来、学習の主体は子供である。子供は、学びたいと思っており、適切な学習環境さえ与えれば、喜んで学習する存在である。子供を主語にした授業とは、こうした「子供観」に立つ「子供が学ぶ」学習者主体の授業である。将来の社会を見据え、必要となる資質・能力を育成するに当たり、「個別最適な学び」と

「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子供が主語となる授業改善に挑戦したい。

【研究の経緯と今後の方向性】

本校は、これまで体育科を中心に学校研究を進めてきた。生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるため、子供一人一人が自己の課題に応じたためあてを設定し、その達成を目指したり、場の設定等の工夫により、自分に合った学習環境を選択したりできるようにするといった指導の個別化を、単元の学びの中で図ってきている。また、必要に応じて他者の考えに触れるよさや、チームとして目標の達成に挑む楽しさなど、実感の伴った協働的な学びも学習過程に意図的に位置づけたりしている。こうした実践の積み重ねにより、主体的に学ぶ子供の姿につながっている。今年度は、これまでの土台に立ち、体育科で得た学びを他の教科・領域にも波及させ、全ての教育活動をとおして主題に迫っていくこととする。

3 研究の内容

一人一人の子供を主語にした授業により、主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力を育成するとともに、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける自立した学習者を育成していくうえで、以下の内容に焦点化を図り、研究を進めていく。

(1) 自己選択・自己決定の場を保障する単元の構想

内容や時間のまとまりを見通し、一人一人の児童が必要となる教材や資料などを選択したり、自分に合った学習方法を決定したりすることのできる単元を構想する。

(2) 自ら学びを調整する自己評価と振り返りの充実

一人一人の子供が、自ら学習状況を把握し、学習の達成感や成就感を味わうとともに、その後の学習を自ら調整することができるようにする。

(3) 子供の主体的な学びを引き出す学習環境の整備

GIGAスクール構想の環境の下、ICTの効果的な活用を図りながら、一人一人の子供が必要に応じて自ら働きかけ、学びに向かうことのできる学習環境を整える。

4 研究の方法

(1) ともに学びともに育つための研究組織づくり

一人一人の教員が追究したい学習方法や教科、領域等の希望を基にグループングを行い、部会を構成する。その際、経験年数等を考慮し、若手と経験が豊富

な教師がともに学び、新たな学びを創造できるような組織編成とする。

研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、各部会の代表で組織し、研究の内容や方法等について協議するとともに、研究全体会で成果や課題を共有する。

(2) 先行実践及び理論研究

個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に関する先行実践等について、研究会への参加や講師招聘、文献等をとおして学び、一人一人の教員が追究したい学習方法等の明確化を図るとともに、研究成果を全体に還元し、理論に対する理解を深める。

(3) 実践研究

授業研究会については、各部会の設定した学習方法に基づく授業研究会を全体でそれぞれ1回ずつ行う。それ以外は部会ごとの授業研究会とし、互いの授業に学び合う機会を確保する。研究の1年次となる今年度は、具体的な子供の学びの姿のエピソードをできるだけ多く蓄積することを大きなねらいとする。

5 研究の計画

- 《1学期》・ 7月 3日(水) 山形大学 森田先生による授業通覧・指導
 - ・ 研究部会毎の先行実践及び理論研究による学習方法の決定
- 《2学期》・ 研究成果報告会 及び 授業研究会 (日程は未定)
 - ・ 12月10日(火) 授業研究会 山形大学 森田先生参観予定
- 《3学期》・ 授業研究会 (日程は未定)
 - ・ 研究のまとめ